内部様式の特徴

三本溝の敷居(しきい)

外の溝2本に板戸(2枚)を引き違いに立て、内側の1本に障子1枚を立てる。

昼間は板戸を重ねて引き障子で明かりをとる。1間のうち常に半分は板戸となる。雨戸が一般化し、へやがより明るくなるのは、江戸時代後期のこと。

ちょうばと手あぶりのいろり

庄屋としての執務などのとき使われたへや。

ぬれえん

建築当初から設置されていた。特に縁框(かまち)は当初材である。縁板は当初材ないしそれにごく近いものである。縁板の目地は「たにきりめじ」(谷切り目地)と呼ばれるもので、数寄屋などに見られる。

蔀戸(しとみど)

上の戸は内側(寺社の場合多くは外側)に持ち上げて鉤(かぎ)で固定し、明かりをとる。(半蔀、釣蔀)。下の戸は溝に沿って引き上げて外すことができる。柱に上の戸を固定する痕跡があり、それにより復元した。

ぶつだん(仏壇)

ちょうばの北側壁に設置されており、ひろま型上層農家の特徴があらわれている。この地域で、現在ひろく見られる仏壇が一般化するのは、19世紀(江戸末期)以降のことであった。

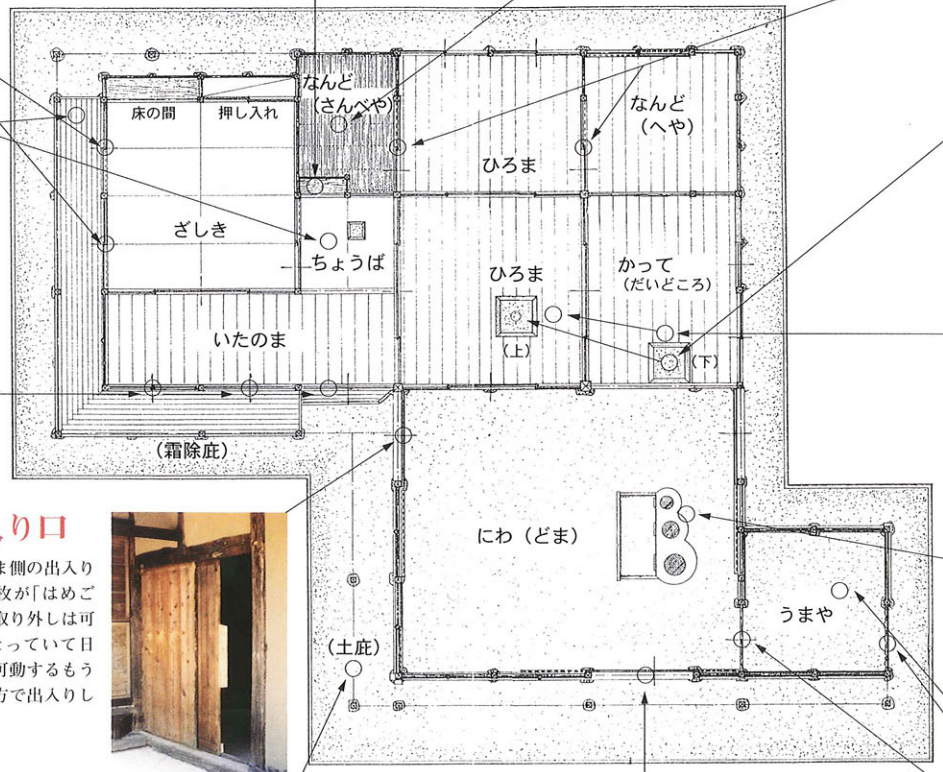
なんど(へや)・さんべや

納戸の一つで、入り口のつくりは納戸構え。お産にも使われたとの言い伝えがあった部屋。解体時に竹すの子の一部が発見され、言い伝えが確認され復元された。

床下には下図のように盛り土がなされている。

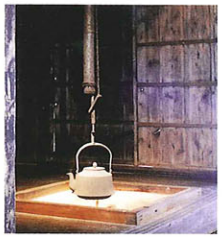
なんど構え(納戸がまえ)

なんど(へや)出入り口の様式の一つ。敷居を床より上げ、片袖(そで)壁で、片引きの板戸になる。この地方では240～50年前までで、その後は引き違い戸に変わっていく。納戸構えは寝殿造りにも見られる様式。



自在鉤(じざいかぎ)または鉤づるし

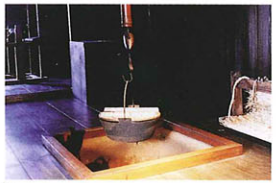
解体時に天井に保存されていた当初のもの、一部修理。鉄びんや鍋をかけた。



いろり　しも(下)いろり、かみ(上)いろり

下いろりは、痕跡から復元した。材料は壁土と同じ。ふだんは、下いろりが使われた。上がり框(かまち)と接したところにあるので便利であり、気がねない客の接待もおこなわれた。

かみ(上)いろりは、会合のときや一時期まゆの乾燥などに使われることが多かった。



出入り口

ひろま側の出入り口は一枚が「はめごろし」(取り外しは可能)になっていて日常は、可動するもう一枚の方で出入りしていた。

かまど

当初の様式を復元した。壁土と同じ材料でつくられている。

板庇(いたびさし)(土庇、霜除庇)

柱にのこる痕跡から復元した。

当初の庇は、板で葺かれていた。

にわ(どま)出入り口

馬の出入りや農作業に伴う出入りは、高さ、うちのり、ともに他のものより高く広い南側の出入り口が使用された。

とぼぐちなどともいう。

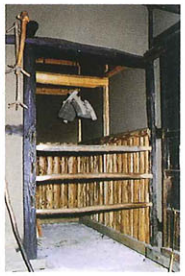
東側出入り口は、かって(勝手)作業などに使用された。これらの出入り口の戸は、大戸(おおど)ではなく当時は2枚引きの板戸であり、大戸(1間幅くらいの1枚戸)が一般化するのはこの地域の農村住宅においては、19世紀を過ぎてからであった。

うまや(厩)

桁の相かき痕や、柱のませ棒穴の痕跡により、建築当初から厩があったことが確認され復元された。どまから曲がりをなしている。

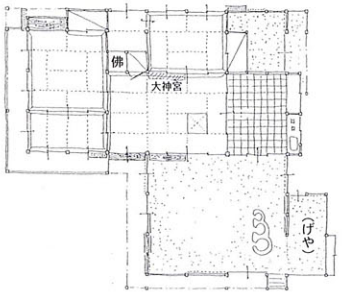
ませ棒は、厩の出入りの仕切りの棒で、かいば桶(まおけ)なども下げた。

敷き藁や馬肥(まごえ)の出し入れは、うしろにある別の出し入れ口から行った。



解体・修理前の平面図

(生活様式の変化にともない生活の便利のため民家は改修がくり返しおこなわれてきた。古民家の復元は、一般的にその民家の特徴がよく表れている時期の姿にする。今回の復元は、建築当時の姿にすることを目的としている。)



建物の当初の諸様式を発見するため精密な調査をすすめ、可能な限りの部材を復元するため慎重な解体工事が行われた。(平成7年度)